北九州市立文学館 ニュース

文学の栞（しおり）

Kitakyushu Literature Museum News

第24号

2018年10月1日発行

『赤い鳥』創刊百年と北九州の児童文化・児童文学活動

館長　今川　英子

私は、（略）現文壇の主要なる作家であり、又文章家としても現代第一流の名手として権威ある多数名家の賛同を得まして、世界の小さな人たちのために、藝術として眞價ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起したいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰發行することに致しました。

大正八（一九一八）年、鈴木三重吉が童謡童話雑誌『赤い鳥』を創刊した時の文章です。

賛同した作家として森林太郎（鷗外）や島崎藤村などが挙げられ、芥川龍之介は創刊号に「蜘蛛の糸」を寄稿しています。そのほか「杜子春」や有島武郎の「一房の葡萄」、小川未明の童話、新美南吉の「ごん狐」などもここから生まれました。「童謡」は北原白秋が担当、西条八十もいて、曲もつけられ、明治期の国家主導の「唱歌」よりも自由で芸術的と言われています。

『赤い鳥』の創刊は、大正デモクラシーの時代を背景に、子どもを純粋無垢なものとして再発見し、子どもたちのために芸術性の高いものを表現していこうという運動でもありました。こうした児童文化運動の影響は北九州にも及び、やがて根付いていきます。

大正十五（一九二六）年三月、黒田晴嵐、阿南哲朗らによって小倉児童芸術協会が結成されました。顧問に北原白秋、野口雨情、後援者に、檜山荘主人の橋本豊次郎、多佳子夫妻、杉田久女らを迎え、童謡舞踊や児童劇など目覚ましい活動が展開されました。昭和二（一九二七）年には、阿南らが「南方童話会」を結成、口演童話を各地で行い、七年、久留島武彦の提言で九州電気軌道により開園されたコドモノクニ到津遊園は、北九州の児童文化活動の中心となりました。十二年夏からはじまった林間学園は、現在も続いています。

戦後は昭和二一（一九四六）年七月、「九州童話連盟」が結成され「九州童話」を刊行、童話コンクール等を実施。二四年には若松に児童研究グループが生まれ、童話、幻灯、紙芝居、歌唱指導を行いながら「子供会」作りを勧め、各地に拡がっていきました。八幡製鐵所内にも童話研究会ができ、三八年、五市合併時には、「北九州児童文化連盟」が発足、現在に至っています。

こうした児童文化活動のなかで、児童文学の確立を目指した同人誌が「小さい旗」です。創刊は三〇年年十二月。編集発行は白仁田宗太、二号から世良絹子と水上平吉ら、四号からみずかみかずよが参加、それぞれ故人となられましたが、現在も刊行が引き継がれています。

このような本市における児童文化・児童文学活動は全国的に見ても特筆すべきことです。近代になって急速に発展した重工業都市の特性として、合理性、利便性が優先されがちな状況の中で、何とか子どもたちの健やかさを守り、未来に向けて育成に尽力しようとした人々の熱い想いが伝わってきます。

この十二月には、お隣の中央図書館に「子ども図書館」が開館します。この街の児童文化、児童文学の活動の歴史を伝えるコーナーも設置いたしますので、どうぞ足をお運びください。

小倉児童芸術協会発会式　小倉の堺町小学校講堂。
背景の幕の椿は杉田久女の制作。

目　次

『赤い鳥』創刊百年と北九州の児童文化・児童文学活動 …… 1
第26回特別企画展　まど・みちおのうちゅう …… 2
開会記念講演会「まど・みちおの詩と絵」 …… 3
長野ヒデ子さん講演会「まどさん まどさん だいすき まどさん！」
折り紙のワークショップ
期間限定コラボメニュー「ぞうさんのカレーライス」ほか
宗左近記念室紹介 …… 4
ＳＮＳ紹介
北九州市立文学館　展示リニューアル基本・実施設計
刊行予告　文学館文庫⑭
『北九州ゆかりの作家が書いた　児童文学作品集』 …… 5
平成30年度上半期「偲ぶ会」の紹介、第５回宗左近忌の様子
子どもノンフィクション文学賞作品募集
ゆかりの作家たちの活動紹介 …… 6
お祝い・お悔やみ …… 7
第27回特別企画展　開催予告 …… 8
描かれた西郷どん展 ～アート、文学、サブカルから～
寄贈者・提供者、提供雑誌

今年の夏は、詩人のまど・みちおを紹介する特別企画展「まど・みちおのうちゅう」を開催しました。まど・みちおは今も子どもたちに口ずさまれる「ぞうさん」、「やぎさん ゆうびん」、「ふしぎな ポケット」などの童謡詩や多くの詩を書き、「児童文学のノーベル賞」と言われる国際アンデルセン賞作家賞を日本人で初めて受賞しました。

本展では、まど・みちおの生涯を資料やパネルでたどるとともに、50代初期に描かれた抽象画を紹介しました。

〈構成〉

第1章　まど・みちおの生涯
1．幼年期
2．童謡詩人をこころざして
3．戦争
4．編集者として
5．詩人として

第2章　まど・みちおの絵画

第3章　ゆかりの人々

第1章では、創作ノートや日記などの自筆資料、編集者時代に描いた雑誌のカット、詩が掲載された雑誌や詩集などを紹介しました。また、会場内で読んでいただけるよう詩のパネルを約25点展示しました。

第2章では、本展の見どころの一つ、まどさんの絵画を紹介しました。出版社退職直後の童謡詩人から詩人への移行時期（51歳から55歳頃）にかけて、集中的に描かれた抽象画を中心に展示し、詩とは違ったまどさんの宇宙観の表現をご覧いただきました。

第3章では、児童文学者の神沢利子、阪田寛夫などゆかりの人々がまどさんについて書いた文章をパネルで紹介しました。

また、自由に持ち帰りができるまどさんの動物の詩が書かれたカード（全15種類）や折り紙コーナーが人気でした。その他、映像コーナー、写真撮影コーナー、閲覧コーナーなど親子で楽しんでいただけました。

展示資料＝約２５０点
監　修＝周南市文化振興財団
企画協力＝ＮＨＫサービスセンター

〈アンケート〉

・まどさんの詩からうけるイメージと絵からうけるイメージが全く違うことに驚き、ますますまどさんが好きになりました。（30代）

・小学校入学前の息子が「一ねんせいになったら」を歌って勇気と元気をもらっていました。まどさんの詩がこんなに身近にあったんだと思い返しました。（60代）

・詩集作り（※詩のカード）が楽しかった。15種類の詩をすべて覚えたい。（10代）

・まどさんは、詩を作るのにたくさん考えて作っていました。（9歳）

開会記念講演会「まど・みちおの詩と絵」

平成30年7月21日

開会を記念して、まどさんと30年近い親交を持たれた周南市美術博物館館長の有田順一さんの講演会を開催しました。まどさんの生涯を、写真やインタビュー映像などで紹介したあと、詩と絵についてお話いただきました。

まどさんは徳山での幼少期の一時期、親兄弟と離れて過ごしました。孤独を癒したのが実家の周りにあった自然で、草や虫などとふれあうことで、想像の世界に思いを馳せる少年だったそうです。この幼少期の体験がまどさんの創作の原点になっていると話されました。まどさんの詩は、①ユーモアをもった詩やナンセンスな詩、②地球のすべてのものが自分であることを喜び他者と共生していることをうたった詩、③宇宙がすべてのものを抱きしめ生かしてくれているという「宇宙観」をうたった詩の、大きく三つの特徴に分けられることを紹介されました。

有田順一さん

抽象画については、描かれた時期が童謡から詩の創作に転換していく移行期にあたることが重要だとされました。抽象画は色と形だけでできた自由な芸術で、そこから喜怒哀楽や哲学が感じられます。抽象画を自由に描いた達成感を経て、定型詩の童謡から枠のない自由律の詩を創作していく方向へ向かい、最初の詩集『てんぷらぴりぴり』が生まれたことを説明されました。

まどさんの詩と絵の特徴を分かりやすくお話いただきました。

長野ヒデ子さん講演会「まどさん まどさん だいすき まどさん！」

平成30年7月29日

台風の接近が心配されるなか、絵本作家の長野ヒデ子さんにご講演いただき、まどさんとの交流や、紙芝居、詩についてお話しいただきました。

まどさんの詩を紙芝居にしたものは『おひさまにこにこ』と『てて』の二作品。うち『おひさまにこにこ』の絵を長野さんが描かれました。紙芝居を作りたいという話を編集者がまどさんに伝えた時、「紙芝居は一度も作ったことがないけど、紙芝居っていいね」と、とても喜んでくださったそうです。長野さんは、『おひさまにこにこ』は、朝起きてごはんを食べるまでの短い時間のことを書いた詩だが、世界中の子供たちが平和で幸せな朝が迎えられることはこれ以上ない幸せで、まどさんは日常のありふれたことがいかに大事か、そしてその中に深いものがあるということを現したのではないかと話されました。その他、紙芝居は通常3色だが、特別に4色で作ったこと、お釜を書くとき、まどさんが「土鍋」ではなく「電気釜」がいいと言われ描き直したエピソードなども紹介されました。

また台風が近づいていたことに因み、まどさんの詩「おかあさん」を朗読。「かぜ ふけ びょうびょう／あめ ふれ じゃんじゃか」という表現に、大好きなお母さんがいてくれれば台風もこわくないぞという子どもの気持ちが現れ、短い詩のなかにまどさんの大きな世界が現れていると話されました。

台風の影響で時間を短縮しての講演会となりましたが、聴講者は長野先生の紙芝居の上演やまどさんの詩の話に聞き入っていました。

折り紙のワークショップ

平成30年8月18日（全2回）

講師は折り紙作家のフチモトムネジさんです。まどさんの詩に書かれた動物から、スワン、ヤギ、ゾウ、クマを折りました。1枚の紙から切らずに折る折り紙に、参加者たちは苦労しながらも集中して完成させていました。

期間限定コラボメニュー

企画展の開催期間中、文学館に隣接するカフェ・ラポール中央図書館で特別メニューを提供していただきました。まどさんの詩に因んだ、「ぞうさんのカレーライス」や「まどさんの動物パン」（カエル、クマ、ウサギの3種類を順に提供）は大好評でした。

【宗左近記念室紹介】

平成26年3月に戸畑図書館内にオープンした宗左近記念室、皆様、もう足をお運びいただけたでしょうか。

詩人・美術評論家・翻訳家として日本近代文学史に足跡を遺した宗左近は、戸畑の牧山峠に生まれ、東京に出るまでの少年期を戸畑の地で過ごしました。彼の業績を記念、顕彰する場として宗左近記念室が設置されたのですが、改めてご紹介したいと思います。

宗左近記念室

戸畑図書館の正面入口をまっすぐ進むと、右側に印象的な紺色の壁があります。壁面には宗が北九州を題材に書いた一行詩集『響灘』の詩句があります。室内は宗の業績を紹介したパネルの他、宗の自筆資料などを不定期で入れ替えて展示しています。現在は『響灘』の自筆原稿、代表作『炎える母』の創作ノート、『縄文』の創作ノート、自筆原稿、宗の書作品「冬の思想　大夕焼けの青氷柱」を展示しています。

そして今年6月からは、宗左近旧蔵の縄文土器「動きやまぬ眩暈の定着」（宗左近命名）を展示しています。宗左近は、縄文文化に深い関心を持ち、縄文の土器、土偶などを多数収集していました。その殆どは、宮城県中新田町（現・宮城県加美町）に寄贈され、宗左近記念縄文芸術館に展示されています。今回展示しているものは、妻の香さんの手元に残っていたもので、26年10月に文学館で「宙のかけらたち―詩人・宗左近展」を開催した際にご寄贈いただいた2点のうちの一つです。この土器との出会いが詩集『縄文』に始まる詩作群《縄文シリーズ》を執筆する契機となった、と言われています。

今年度末には開設5年を迎える宗左近記念室。この機会にぜひご覧いただき、縄文土器から宗が眼差した縄文の「宇宙」を感じてください。

展示の様子

SNS紹介

文学館では広報活動の一環としてホームページの他、3つのSNS（Social Networking Service）サイトでの情報発信を行っております。現在運用しているのは、フェイスブック、ツイッター、インスタグラムの三つのSNSです。文学館で開催される展覧会、イベントの情報のほか、北九州の文学に関する情報などを掲載しております。左記のQRコードを読み取ることで直接アクセスできます。皆様のアクセスをお待ちしております。

北九州市立文学館
ホームページ

北九州市立文学館
フェイスブック

北九州市立文学館
インスタグラム

北九州市立文学館
ツイッター

北九州市立文学館 展示リニューアル 基本・実施設計

平成30年10月

文学館は平成18年11月に開館して以来、10年以上が経過しました。

時間の経過とともに、文学を取り巻く環境は大きく変化し、当館における展示のあり方にも変革が求められてきていることから、平成29年12月に文学館展示リニューアル基本計画を策定しました。

この基本計画では、「1　みんなの文学館～みんなで学び、育てる文学館～」、「2　楽しい文学館～誰もが楽しく集える文学館～」、「3　広がる文学館～広く羽ばたく文学館～」の3つの整備方針を柱としています。

平成30年度は、展示リニューアルの具体的な展示設計を行うため、現在、公募型プロポーザル方式により決定した設計業者と設計の協議を進めています。

刊行予告　文学館文庫⑭『北九州ゆかりの作家が書いた児童文学作品集』

14冊目の文学館文庫は、北九州ゆかりの作家が書いた児童文学作品集です。8名の作家、全16作品を収録します。

〈収録内容〉

竹久夢二　「都の眼」「クリスマスの贈物」「大きな蝙蝠傘」「先生の顔」「博多人形」

林芙美子　「蛙」「鶴の笛」「狐物語」

火野葦平　「石と釘」

戸川幸夫　「爪王」

栗原一登　「星と鬼たち」

阿南哲朗　「よるの動物園」「ふるさとの木のかおり」「ゾウとラッパ」

世良絹子　「あっちゆきだよヒャータ」

みずかみかずよ　「生命を生きる―詩を書き始めたころ」

当文庫は、「子ども図書館」（当館に隣接する市立中央図書館内）の開館にあわせ、12月に刊行予定です。「子ども図書館」の一角に設置される、北九州市ゆかりの児童文学者とその作品を紹介する展示コーナーで閲覧いただけます。なお販売は、文学館や市内の書店クエスト小倉店で行います。

ぜひお手にとって読んでみてください。

平成30年度上半期「偲ぶ会」の紹介

北九州では文学者を偲ぶ集まりが数多く開催されています。今年度の上半期に開かれたものは次のとおりです。

第2回みずかみかずよ誕生祭
4月1日　八幡東区・八幡図書館

第36回岩下俊作忌
4月14日　高炉台公園・岩下俊作文学碑前

第33回劉寒吉碑前の集い
4月20日　文学館前・劉寒吉文学碑前

第56回森鷗外を偲ぶ会
6月19日　紫川沿い・森鷗外文学碑前

第5回宗左近忌
6月20日　戸畑区・西日本工業倶楽部

第37回林芙美子忌
6月24日　門司区・小森江西市民センター

今回は第5回を迎えた宗左近忌の様子をご紹介します。宗左近忌は平成26年から宗の命日に開催されています。当日は晴天に恵まれ、まずは北九州市立美術館本館前庭にある宗左近文学碑に参加者の皆様が集まり、自見榮祐さん（宗左近ファンクラブ代表世話人）が献酒をされました。

その後、西日本工業倶楽部に移動。自見代表のご挨拶があり、平成27年に亡くなられた香さんの遺言により、宗左近の著作権を含めた遺産の全てが北九州市に遺贈されたことなどをお話をされました。

この日は宗の終の棲家となった千葉県市川市より、宗夫妻と交流の深かった伊東美佐子さん、戸矢晃一さんにお越しいただき、お二人に在りし日の宗夫妻についてお話いただきました。続いて文学館学芸員の稲田が「宗左近の魅力」と題して講演しました。

そして戸畑高校出身のシンガーソングライター、冨永裕輔さんのミニコンサートと続きます。冨永さんは宗左近の詩をコラージュした、「響灘～les misérables」を作曲され、今年8月3日にはそれを収録したアルバム「シルクロード」でメジャーデビューされました。冨永さんは「響灘」ほか3曲を歌われ、その美しい歌声に会場の皆様も酔いしれていらっしゃるようでした。会の終わりには、北橋健治北九州市長が挨拶を行い、閉会となりました。

来年は宗左近生誕１００の記念年です。それに合わせ、文学館では現在、文学館文庫15集、宗左近『鑑賞百人一首』の刊行準備を進めております。百人一首の歌に対して、宗が「詩釈」、詩をもって歌を解釈するという体裁の本書は、古代日本の歌心に対する宗の眼差しが表れています。是非、お手に取っていただければと思います。

子どもノンフィクション文学賞　作品募集

ノンフィクションとは、自分で、見たり、聞いたり、経験したことを、調査・分析・理解し、作為（つくりごと）を加えずに、自分の言葉で表現したものです。自分だからこそ感じて考えることができたものを、自分にしか書けない表現で作品にしてください。

４００字詰め原稿用紙で、小学生の部は3～20枚、中学生の部は5～50枚以内にまとめてください（縦書き）。パソコン・ワープロ等の原稿は、A4判の用紙を使用して、縦書きで20字×20行にまとめてください。

最終選考委員は、那須正幹さん（児童文学作家）、最相葉月さん（ノンフィクションライター）、リリー・フランキーさん（イラストレーター、作家、俳優など）です。

詳しくは文学館ホームページ（http://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/）に掲載しています。

ゆかりの作家たちの活動紹介

現在活躍されている作家にも、北九州ゆかりの方は多くいらっしゃいます。ここではページの許す限り、ゆかりの作家の最近の刊行状況や活動についてご紹介します。順不同になりますこと、ご了承ください。

門司区出身の**秋山香乃さん**が『龍が哭く　河井継之助』（PHP研究所　二〇一七年五月）を刊行されました。本作は「新潟日報」ほか、10紙で連載され、長岡藩家老の河井継之助の生涯を、司馬遼太郎が『峠』で描いたものとはまた違う形で描かれています。

佐伯泰英さん（八幡西区出身）は『異郷のぞみし　空也十番勝負　青春篇』（双葉文庫　二〇一八年六月）を刊行され、また「酔いどれ小籐次」に続く人気シリーズ「新・酔いどれ小籐次」の11巻『椿落つ』（文春文庫　二〇一八年七月）、12巻『夏の雪』（文春文庫　二〇一八年八月）を刊行されました。

指方恭一郎さん（小倉北区在住）は本名の**日野真人**名で『殺生関白の蜘蛛』（ハヤカワ文庫JA　二〇一七年一一月）を刊行されました。かつて松永弾正が所有していた名器、平蜘蛛の茶釜を巡る密謀と、太閤秀吉が養子、秀次に切腹を命じた秀次事件とが絡み合う歴史ミステリーで、第7回アガサ・クリスティー賞優秀賞の受賞作品です。

また、**帚木蓬生さん**（八幡西区にゆかり）が、安房の漁師で日蓮の従者となった見助を主人公に日蓮を描いた小説『襲来』（上下巻　講談社　二〇一八年八月）を刊行されました。

そして二〇一七年一二月に亡くなられた**葉室麟さん**（小倉北区出身）ですが、遺作が次々と刊行されています。幕末の四賢候の一人、松平春嶽を描いた『天翔ける』（KADOKAWA　二〇一七年十二月）、『玄鳥さりて』（新潮社　二〇一八年一月）、『青嵐の坂』（KADOKAWA　二〇一八年五月）『蝶のゆくへ』、『影ぞ恋しき』（文藝春秋　二〇一八年九月）が刊行されています。また二〇一二年に刊行された『散り椿』は、岡田准一さん主演で映画化され、第42回モントリオール世界映画祭で最高賞に次ぐ審査員特別グランプリを受賞、今秋公開されます。亡くなられてのちも葉室さんの作品世界は広がりつづけており、多くの読者に愛されていることが分かります。

葉室麟『蝶のゆくへ』
（集英社　二〇一八年八月）

八幡西区出身の**加納朋子さん**は、『カーテンコール！』（新潮社　二〇一七年一二月）を刊行されました。私立のお嬢様大学・萌木女学園に通う「ワケアリ」の女子学生たちを連作短篇集のかたちで綴った作品です。

まはら三桃さん（八幡西区出身）は『青がやってきた』（偕成社　二〇一七年一〇月）『疾風の女子マネ！』（小学館　二〇一八年五月）を刊行されました。『青がやってきた』は、サーカスのマジシャンを父にもつ少年・青が引っ越し先の学校で出会う少年少女、彼らが青と出会い、変わってゆくさまを描いた連作短篇集。『疾風の女子マネ！』は陸上部のマネージャーになった咲良が、自分の感情の葛藤、部員たちとの衝突を経て成長してゆく青春小説です。

竹下文子さん（門司区生まれ）は絵本『しゃっくりくーちゃん』（絵・岡田千晶　白泉社　二〇一七年九月）、『いそげ！きゅうきゅうしゃ』（絵・鈴木まもる　偕成社　二〇一七年一〇月）を刊行。そして、「風町」という架空の街を舞台に描かれるファンタジー短編小説集『風町通信』（ポプラ社　二〇一七年九月）も刊行されています。

二〇一七年九月に亡くなられた**林えいだいさん**（戸畑区にゆかり）の著書が二冊、復刊しています。写真記録『これが公害だ　北九州市「青空がほしい」運動の軌跡』（新評論　二〇一七年三月）は、一九六八年刊行の『これが公害だ　子どもに残す遺産はなにか』を完全復刻し、初版に収まらなかった写真など補足資料も充実しています。また一九八三年刊行の『海峡の女たち　関門港沖仲仕の社会史』を復刻した、写真記録『関門港の女沖仲仕たち　近代北九州の一風景』（新評論　二〇一八年三月）も刊行されています。

福澤徹三さん（小倉北区在住）は大人気シリーズ「侠飯」の第5巻『侠飯5　嵐のペンション篇』を刊行されました。「侠飯」は二〇一六年にテレビドラマ化、漫画化され、コミックスは現在、第6巻まで刊行されています。強面の柳刃が作る絶品料理の描写をお楽しみください。

福澤徹三
『侠飯5　嵐のペンション篇』
（文春文庫　二〇一八年七月）

小説も手掛けられる写真家の**藤原新也さん**について、「沖ノ島国宝展×藤原新也展」が現在開催中（会場・宗像大社神宝館　二〇一八年七月二一日～十一月三〇日）です。沖ノ島の国宝と藤原さんの感性で撮影された、禁足の地、沖ノ島の再現を試みた展覧会です。沖ノ島関連では、二〇一三年に安部龍太郎さんとの共著で『神の島　沖ノ島』

を刊行されています。

劇作家で小説家でもある**松尾スズキさん**（八幡西区出身）の最新刊『もう「はい」としか言えない』は第一五九回芥川賞候補にノミネートされました。表題作のほか「神様ノイローゼ」をカップリングした本書は、最新の松尾スズキさんの世界観を味わえる一冊です。

松尾スズキ
『もう「はい」としか言えない』
（文藝春秋　二〇一八年六月）

『東京タワー』に代表される小説家でもあるリリー・フランキーさん（小倉北区出身）は、イラストレーター・俳優とマルチに活躍されていますが、是枝裕和監督の『万引き家族』（配給・ギャガ　二〇一八年六月公開）で主演を務められました。本作は第71回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドールを受賞。日本人監督作品としては一九九七年の今村昌平監督『うなぎ』以来21年ぶりのこととなりました。

高橋睦郎さん（八幡東区生まれ、門司区育ち）は詩集『つい昨日のこと私のギリシア』（思潮社　二〇一八年六月）を上梓されました。本書あとがきには、門司の中学校時代に出会った呉茂一訳『ギリシア抒情詩選』が「詩作の最重要な契機になった」と述べられています。『新体詩抄』、鷗外の『於母影』などを通じて、ヨーロッパ詩との接続を果たした日本近現代詩にとって源流ともなった古代ギリシャへの高橋さんの眼差しが感じられる一冊です。

平出隆さん（門司区出身）は自伝的回想録『私のティーアガルテン行』（紀伊國屋書店　二〇一八年八月）を刊行されました。本書は紀伊國屋書店発行の「scripta」に二〇一一年から連載されていたものの書籍化で、幼少期からの出来事、出会った人々が、平出さんのみずみずしい感性で描かれています。また、10月6日からは展覧会「言語と美術―平出隆と美術家たち」がDIC川村記念美術館で開催されます（二〇一九年一月一四日まで）。

田中慎弥さん（門司区にゆかり）は『孤独論　逃げよ、生きよ』（徳間書店　二〇一七年二月）を刊行されています。さまざまなしがらみの中で生きている「奴隷」的状況からの逃避、そしてしがらみのない「孤独」に身を置くことが自分を取り戻す唯一の方法であると著者は言います。芥川賞作家が語る珠玉の人生論です。

平野啓一郎さん（八幡西区出身）は『ある男』（文藝春秋　二〇一八年九月）を刊行されました。平野さんは、作家デビューから20年目となった今年、今の自分が感じていること、考えていることが最もよく表現できた作品だ、と言われています。また、デビュー20周年を記念し、「文學界」一〇月号に特集「平野啓一郎の世界」が掲載されています。そして二〇一六年に刊行された『マチネの終わりに』の映画化が進んでいるとのこと。福山雅治さん、石田ゆり子さん主演で二〇一九年秋の公開予定です。

村田喜代子さん（八幡東区出身）は『火環　八幡炎炎記・完結篇』を刊行されました。二〇一五年刊行の自伝的小説『八幡炎炎記』の完結篇としての本作は、製鐵の街・八幡に生まれ育った少女、ヒナ子の成長を描いた物語です。いきいきと描かれる戦後の八幡の風景は、どこか懐かしく、今の風景の「向こう側」を見せてくれるようです。

『火環　八幡炎炎記・完結篇』
（平凡社　二〇一八年五月）

藤野千夜さん（小倉北区生まれ）は芥川賞作家のデビュー前夜と今を描いた自伝的小説『編集ども集まれ！』（双葉社　二〇一七年九月）を刊行されました。同じく自伝的小説『D菩薩峠漫研夏合宿』では男子校に通う一五歳の《わたし》が主人公でしたが、本作では出版社に勤める漫画編集者《笹夫》を、22年後、作家になった《笹子》（＝《笹夫》）が回想する構成となっています。

山崎ナオコーラさん（小倉北区生まれ）は、『偽姉妹』（中央公論新社　二〇一八年六月）を刊行されました。シングルマザーの正子は宝くじで当たった三億円で「屋根だけの家」を建て、姉と妹と暮らしています。しかしそれに息苦しさを感じ、二人の友人と「姉妹」になりたいと願います。結婚に〝離婚〟があるなら、姉妹だって別れたり、新しく作ったりしてもいいのでは？　新しく自由な家族小説となっています。

北九州ゆかりの作家たちの最新刊、ぜひお手にとって読んでいただきたいと思います。

【お祝い】

・角野栄子さん（児童文学作家）
国際アンデルセン賞作家賞受賞
平成19年、北九州市でご講演いただきました。
お祝い申し上げます。

【お悔やみ】

・古川薫さん（作家）　平成30年5月5日逝去、92歳。山口県下関市出身、第104回直木賞受賞。
北九州市立文学館開館プレイベント、開館1周年記念講演会などにご出演いただきました。

・林福江さん（林芙美子の姪）　平成30年8月6日逝去、92歳。晩年の林芙美子と暮らし、没後は著作権を管理した。
林芙美子の直筆資料をご寄贈いただいたほか、林芙美子文学賞へも御協力賜りました。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

市制55周年記念
第27回特別企画展開催予告

描かれた西郷どん展

～アート、文学、サブカルから～

平成30年10月27日(土)～12月16日(日)

主　催　北九州市立文学館
企画制作　NHKサービスセンター
　　かごしま近代文学館

明治維新（1868年）から150年、今年のNHK大河ドラマの主人公は西郷隆盛です。維新最大の功績者といわれる西郷ですが、実は写真が一枚も見つかっておらず、実際の姿は明らかではありません。

西郷の姿を美術や文学、サブカルチャーがどのように描き、イメージしていったのかをたどります。

○関連イベント

大河ドラマ「西郷どん」の脚本家

中園ミホさんトークライブ

聞き手：今川英子（文学館館長）
《日時》11月24日（土）13：30～15：00
《会場》北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
《定員》500人
※往復はがきに住所、氏名、電話番号、同伴者の氏名を明記し、文学館「トークライブ」係まで。1枚につき2人まで申込可能。11月5日（月）必着。

中園ミホさん

開会記念講話「錦絵のなかの『西郷どん』」

《日時》10月27日（土）11：00～12：00
《会場》北九州市立文学館
《講師》生住昌大さん（北九州市立大学准教授）

文学講座「西郷隆盛の漢詩と人生 ―敬天愛人の志」（全2回）

《日時》①11月10日(土) ②12月15日(土)
各回13：30～15：00
《会場》北九州市立文学館
《講師》林田愼之助さん（神戸女子大学名誉教授）
※10月17日（水）から電話受付

ほか、カフェ・ラポール中央図書館でのコラボメニューや学芸員の展示解説もあります。

寄贈者・提供者

青森県近代文学館、赤磐市教育委員会、熊山分室、朝日新聞出版、阿部誠文、有川公一、有馬記念館、安徳由美子、池田美保、石井美智子、泉大津市総合政策部地域経済課、茨木市立川端康成文学館、FFGビジネスコンサルティング、仰木奈那子、岡山シティミュージアム、尾道市文化協会、尾﨑テル子、解放出版社、柏木恵美子、KADOKAWA、神奈川近代文学館、鎌倉文学館、菊池寛記念館、北九州市漫画ミュージアム、北九州市立美術館、北九州市立松本清張記念館、九州文化協会、群馬県立土屋文明記念文学館、光草書道会、高知県立文学館、国立民族博物館、五味渕典嗣、さいたま文学館、坂本宮尾、篠崎義道、自鳴鐘同人会、杉本光祥、鈴木城頭土、仙台文学館、船団の会、高山市、田代修司、谷さやん、張允麐、鶴岡市立藤沢周平記念館、東京都江戸東京博物館、徳島県立文学書道館、中尾實信、中島国彦、長塚節研究会、長野ヒデ子、中原中也記念館、波田美城、日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、沼津市芹沢光治良記念館、野中貴子、波佐間義之、埴谷・島尾記念文学資料館、久野禮子、姫路文学館、「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会、福岡市総合図書館、福澤徹三、古谷龍太郎、文京区立森鷗外記念館、平和祈念展示資料館、北海道立文学館、前橋文学館、増田恵津子、松ヶ江郷土史会、松永伍一文学保存の会、まはら三桃、丸橋紀久子、岬の分教場保存会、水木洋子市民サポーターの会、三鷹市山本有三記念館、宮澤篤、村上栄子、森鷗外記念会（津和野町）、森川登美江、柳生じゅん子、矢城道子、山口公和、山本飛雲、行橋市教育委員会文化課文化財保護課、横山万里、吉川英治記念館、吉村昭記念文学館、渡辺考

提供雑誌

藍、avanti、青嶺、馬醉木、花鶏、穴生文芸、あゆみ、あん、いのちの籠、色鳥、海、鷗外、沖、海峡派、回游、季節風、北九州国文、九州作家、九州俳句、九大日文、群炎、月刊俳句界、玄海、こだま、自鳴鐘、scripta、青穂、鄰、船団、川柳くろがね、川柳むらさき、草原、空、第七期九州文學、タルタ、天籟通信、投稿俳句界、新墾、虹野、浜木綿、ふだんぎ北九州、ふよう、ぽち袋、水城野、村、八雁、與謝野晶子研究、遼

2018年10月1日 発行
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/

■ 開館時間
9:30～18:00（入館は17:30まで）
■ 休館日
毎週月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）
年末年始

北九州市印刷物登録番号 1809096C